

梅道人著
新體梅花詩集

全

東京博文館藏版



梅道人

梅22
270

中西梅花道人著

新體梅花詩集
全

東京 博文館藏版



新體梅花詩集題言

「いかに形よもあれ、永く活きて働くべきことをいふは若き詩人の務ある。物よさからふ心、ものをきらふこと、ろ、ものを誇ること、若くはものを打消すのみあること、努力こと業よあらむすことかかれ。その何の益もあからむ。」

「我が友とする若き人々よわれ今切に勧めむとす、人々のおのゝその身の上をおもむこと。詩のあらべ少しとゝの

ひたらば、これのみよて其意いよく善
くありぬへし。」
「詩の含めるもの、即是詩人の世のふく
めるものあり。その誰もえ奪はず、たれも
え縮めず、唯おほひて暗からしむること
あるべきのみ。底事よらせず、影をかへり
みてみづから喜ぶやうなることを本と
したるは、わが取らざるところあり。」
「思を舒べてかくすことおきい、人あおづ
りするは近し。そのわかるとき誰もみづ

から堪ふといへど、まこといえ堪へねば
お里。我友とまゐる人々よわれ今いひむ。君
等の守るべき法度あるよあらず、法度の
君等かみづから作るべきものお里、唯一
詩成らばかあらずその含めること、ろお
のが經歷よ里来れるかと問へ、またその
經歷おのが道を進めたるかをと問へ。譬
へばわかれし戀人、われをすてし戀人、若
くはままか里してひ人をいつまでもこ
ふるは、道を進むべきことよあらず。かゝ

る事をよみいでたるは、言葉いかよ巧ま
るるといへども、何の益かあらむ。」
「詩人のわが世とよもよその言の葉のす
すまむことをつとめよ。かくつとむると
まゆ、いつよても直ちよおのかこよるの
活動したるを活動したらむやを知らむ。
また後よおもゆ、いつよてもおのがこ
ころの活動したりしや活動したらざる
しやを知らむ。」
この法を説きむる大詩人やヨオテある。

これを寫して梅花詩集の題言としたる
の鷗外漁史森林太郎あり。

明治二十四年一月中辭。

梅花詩集序

梅花道人昨秋飄然京を出て美濃尾張の野に彷徨し
遂に虎谿の精舎に寓すること數旬乃ち歸里て梅花
詩集を印行す

道人の京を出るや資斧窮乏備さざる艱苦を嘗む途中
書を友人露伴子に寄す露伴子一讀墮淚潑々覺えず
放聲大哭せんと欲せると云ふ

道人歸て余を根岸の寓に枉訪を温然たる其容渾然
たる其言殆と復た故の善憤善罵高聲四壁を動かす
の道人にあらず余は語て曰く余か此遊實は人間の

二
逆境を閱盡せり余是より於て順境に在る者か未だ人間
の真相の十一をも窺はざる者あるを悟りたりと
余對て曰く然り然れとも往時の兄の如きは則順逆
を以て言ふべきはあらま強て其居りし所を名づけ
は其變境乎

都下文を以て鳴るの士十百人而して概ね皆道人を
敬し道人を愛し道人を禮遇款待せざる者希れあり
則ち能く道人を知らざる者希れあり道人當時或は
思へるからん人間總て是の如きのみと嗚呼人間豈
是の如きものからんや人間は己れを知らざる者の

群團あり偶ま己れを知る者あらは僥倖のみ不思議
のみ道人平生知己者も容れらるゝの變境は居り自
ら視て常とあま而かも不知己者も容れられざるの
常たるを知らざりしかり茲は旅客有り囊は半錢無
し空手徒歩以て百里の路を行かんと欲し食を求む
るに處無く寢し就くは地無し疲憊困頓進退殆ど谷
まる是れ人間の當然あり道人獨り此を以て當然あ
らまを爲し能く空手徒歩以て百里の路を行くべし
と爲し槍笠一頂飄然として途に上れり豈其の變境
を以て常とあし江湖隨處知己者ありと信じたるよ

由るよあらずや

今や道人の既よ自ら往時の變境を悟れり人間の真相を窺へり其の詩眼の俄よ幾等を進めたるや漸トて疑を容れざるなり

曩よ道人嘗て諸子と會飲し酔て莊子を快誦を音吐厲揚一世を叱咤するの概あり何ぞ其壯なるや後未だ旬月おらむを單身策々荒村破驛よ漂零し山寺を敲て一宵の宿を乞ふよ至る何ぞ其悲しきや然れとも若し道人を玉成し梅花詩集をして永く芬芳を藝園よ流さしむる所以を求めの彼よ在らむして此よ在

らん

辛卯一月廿二日報知社よて

思軒居士撰

梅花道人突如として、國民新聞編輯局より
来り、余は一揖して曰く、君未だ梅花詩集
の序を草せざる乎、余笑て曰く然り、頃報
知新聞に於て、思軒居士の君が集に序を
るを見る、余か謂いんと欲する所謂ひ盡
して餘蘊おし、余又蛇足を添る能はざる
あり、道人曰く然りと雖君既に宿約あり、
請ふ一言せよ
余曰己むおくんは則説あり、君自から奇
骨を負ふ、飄蕩清逸、天馬空を行き、尋常規

二
矩を以て律を可らざるものあり、然とも
其の私を察せられ、小心翼翼、性情流露、一
片の天真得て掩ふ可らざるものあり、以
て李太伯の詩は比を可し、若し他日識進
み學熟し、之は加るは堅忍不拔の精神充
實あるは到らぬ、杜律の森嚴精美得て期
を可し、而して更らば加ふるは天を敬ふ、
人を愛し、職分を重んじ、品性を修め、詩腸
以て宇宙を呑むは到らぬ、則ちミルトン
の崇高典麗得て望む可し、造詣此の如し、

豈は獨り詩品をのみ云はん哉
君哄然として曰く、多言をる勿れ、天機漏
らむ可らず、乃ち記して序言と爲す

明治二十四年二月下旬

蘇峰生

自序

新體梅花詩集印刷成る。自序何かものせ
んと思ひたれど、書くべきほどの事更
無し。這般の詩は就て己考へしことども
無きよあらねど、其の別は述るところあ
るべし。故は今の言ひを。座右偶、愛鶴軒所
藏鬼貫の獨語あり、よく若き詩人の病を
箴しぬ。其一二節を爰は移して自序に代
ふるに、千桑山房主人か本集は題せられ
し聲は儼いんとよめあらねど、又自ら誠

むるところ無くんはあらずかし。

二

俳諧をまゐる人あらまじよも云ひこゝ
せば、はや得たり顔よ止まるあり、無下
よほひあくだ侍る。或時の句もありや
まきやうよ覚え、又或時のひたまら成
りがたくもあり侍らん事、幾かひりも
有ぬべし、深く入あんな其程くよ
功つもりて猶むつかしき事を覺侍ら
ん、修行の道よかぎりあらざれは、至り
て止まる興もあらじ。只臨終の夕まで

の修行と知べし。たとへは宗祇法師の
連歌の達人よて、余よあらへる人も無
しといひへど、祇公ひとりの上よは、今
五とせぬ給は、五年の功、十とせぬが
らへたまは、十年の功も有べき事よ
あそ。

又曰く。

聞えぬと云ふ句よ、幽玄と不首尾の差
別侍り。まあとを辨へぬ人のさまく
句を作りて、是よても未だ聞へ過てお

三

もしろからじと、ひたぬきよ詞を抜て
後よ、何の事とも聞えぬ句よあり侍
れど、作者の初一念の趣向を心よ忘れ
侍らねば、我のみ獨り聞ゆるよまかせ
ていひよろむるもかた腹いたし。又幽
玄の句のつたおき心をもて其意味の
おもしろきところを聞得ぬあるへし。
讀去りて已、影をかへりみぬ、味ふべき詞
あらずや。

鬼貫の上島氏惣兵衛、松江維舟の門よ出

で、檀林を吟し、一風を起して世よ鳴る。
伊丹派の祖師あり。

明治二十四年重三の節句

落花村舎主人

漂絮志るを

新體梅花詩集目錄

- 九十九の姫 一頁
- 滴々露 三十七頁
- 静御前 四十二頁
- 毒湛禪師を辭し虎溪山を出るとして 四十七頁
- 松壽軒西鶴の畫像に賛をるとして 四十九頁
- 墨川白鷗の詞四首 五十頁
- 對空吟 五十六頁
- 戯れに露伴子と韻を探りし折柄己了、五の兩

列を得しかば二首

五十七頁

○江戸紫は題を

五十九頁

○春の舎主人

六十頁

○竹の舎主人三首

六十二頁

○鷗外漁史

六十四頁

○古蒼樓主人

六十六頁

○靈魂

六十八頁

○出放題

八十一頁

○旅鳥

九十二頁

○須磨の月夜

九十五頁

○李青蓮が菩薩蠻の意を譯す

九十八頁

○おなじく柳永が卜算子慢を

九十九頁

○原作者の名を失ふ二首

百一頁

○米僊子の西京は行れしと聞き想鴨河納

百一頁

○涼は走せて

百二頁

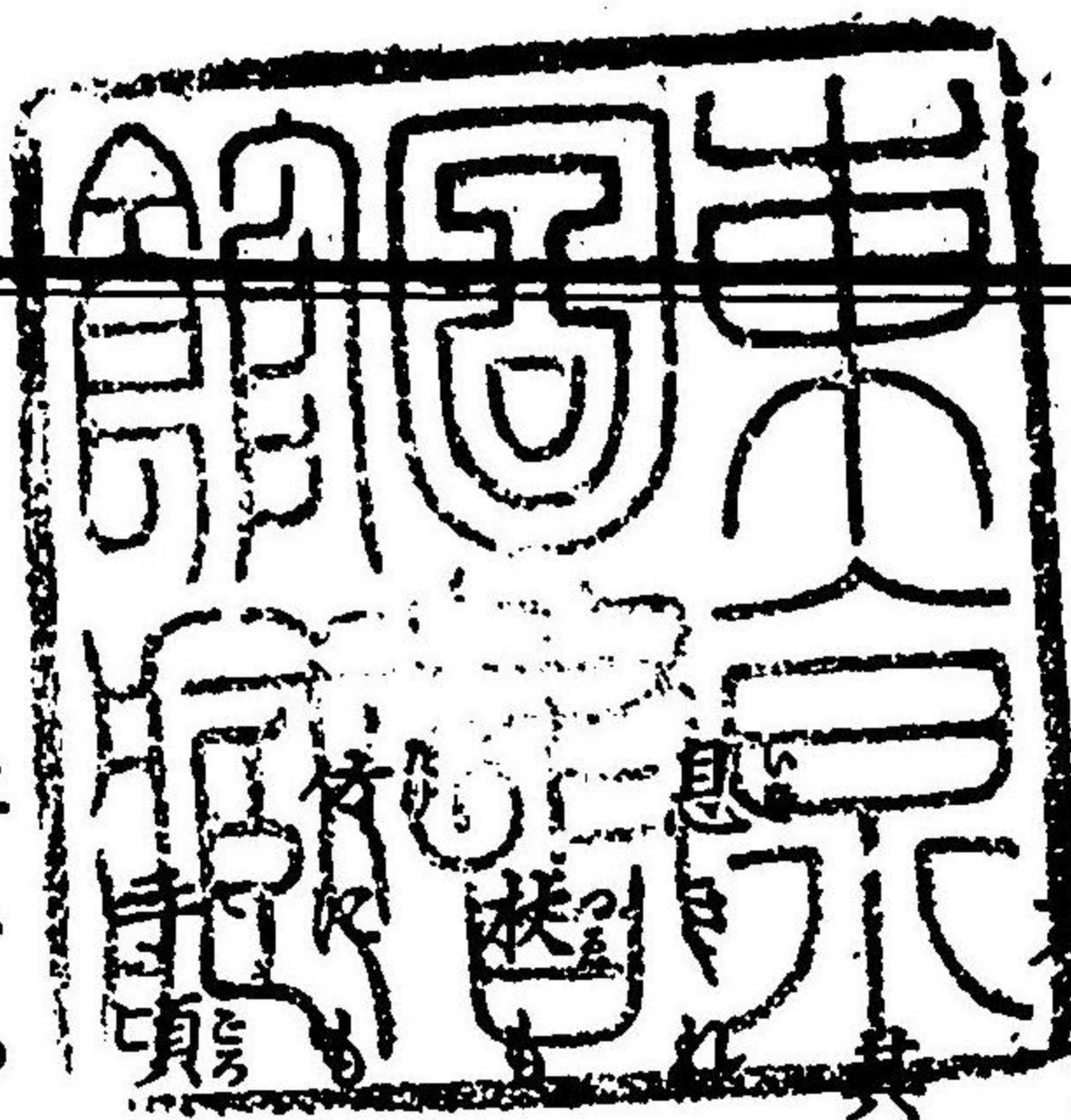
○浦のとまや

百三頁

以上

新體梅花詩集

梅花道人著



九十九の姫

ぬ歩むに腰のほね痛し、
 がなア、杖もがな、
 あれ木にもあれ、
 の棒のほしきことよ、
 こゝらの里に小供は居ぬか、
 居らぬと見える、

九十九の姫

居らば遊ぶに良き場所なるに、
遊ば、子供をつねとして、

棒ちぎり履あらじ、

取りちらしあるは必定、

ア、棒もあるあ杖ほしや、

ホ、笑止や、

昔は杖と云ふものを、

老たる人の変かるゝに、

今の我身が是ほどに、

用ある物とは知ずして、

母なる人の秘られて、

祖父なる人の秘られし、

あづさの弓の、ホ、

我身ながら

笑止のことや、

腰の曲りもありさまの、

其の弓にしも似たるかな、

其の弓折れの杖をしも、

ねだりしに、

父なる人に志かれて、

灸に辛き目見せられしが

母なる人のいましめて、

弓は女子の持ものならし、

をのこゝならば

得させもせめと、

ア、我身

をの子なりせば」

其二

慨くまじきことよ、

我身ものにくるへりと、

さとの子供に難さるゝは、

ものを一途に思へばぞ、

おちぶれし、

今日を、

昨日に比べては、

明日を如何と突詰めて、

心を思ひにかきみだせば、

眼に時ならぬ花咲きて、

耳はつゞみのうつつとも、

夢とも分かたで浮き橋を、

たどれるが如まぼろしに、

まばしは我を忘れはて、

フト心づき見かへれば、

そぞろの衣の脛あらは、

髪はかどろにあさの葉の、
いさ葉の疵の隙間なく、

あるは、

入相の鐘に花も次第黒みて、

人はおぼろ、

影を地に曳くの夕月、

柳晴る空に光おさまりて、

静かなる草屋根のこなた、

あるは、いづこ、

藻鹽焼く葺の苦屋に月さえて、

夜さむの風に鳴く千鳥の、

岸さびしき浦は、

寄せてはかへす波の音に、

心もさわぐ群松の、

影をみづからかへり見て、

只、まよんぼりと踏むのみ」

其三

過去りて今日、

僅に昨日と数ふれば、

百年も、また夢なれど、

歩み来りて立ちどまり、

あの山、この野と眺むれば、

千里も霧の一重なれど、
 憂きに月日をかぞへては、
 つらさに浮世を送りては、
 人の見て面白しと云ふなる月も、
 我はあはれ、
 心を照す鏡ともなれや、
 さらば此苦をうつさせて、
 憂をなぐさむ友ともせんは、
 人の見て面白しと云なる花も、
 我はあはれ、
 我身此の花ともなれや、

さらば夜半の嵐にくだかれて、
 ふたゝび原の根にぞ歸らん、
 願ふは我を此の花にと、
 ゆく心眼にたがへば、
 などて樂と見らるべき」
 ア、ア、我身若し、
 昔ながらの滋賀の里、
 浄行寺門前に、
 細くあげたる煙にふすび、
 氏なきものゝ娘にて、
 花賣爺の子と呼ばれ、

其のまゝ其處に埋れなば、
アレ、彼方を三五人、

脚半の泥もからびしまゝ、

つまをり笠をわきばきみ、

おち穂片手に稻扱かたげ、

苦と云ふものゝ世の中に、

有としも知らぬ高笑ひ、

あぜのほそみち傳ひ行く、

仲間となりて世を安く、

そらは夕陽のさかづきに、

酒を過せしほろよひを、

紅葉にゆづりゆふばえて、
見渡すかぎりあかくと、

照れる名残もいまはや、

人影ながくやまのはの、

鳥もねがらにこゑたえて、

そよとの風も肌さむふ、

むしの音さびしき誰彼時、

脊戸の板にやどを貸す、

旅のからすにおくられて、

我も家路をいそぎつゝ、

風呂に疲れをながしては、

良人が寐酒の二合半を、
 月のあかりにさしきさゝれ、
 酔へば其のまゝひぢ枕、
 障子も立てず戸も繰らす、
 かろきうき世を五十年、
 柳よくらして
 仕舞ひしものを」
 其四
 ものすきな、
 エ、ものすきな、
 姫なら二人、

をの子なら、
 三人の富をたもちつゝ、
 月も花も不足なく、
 榮花はおはす御身よて、
 エ、ものすきな、
 滋賀山寺よもの請ふで、
 げかうの道のかへるさよ、
 五を二のふり分けがみ、
 寺のついで地のいしがさよ、
 花を刺みてまゝごとの、
 餘念をわすれし幼き者を、

父母よねだりて養これ、
 エ、ものすきな、
 思へば恨みの大江様」
 ホ、笑止、
 我身もの狂へりと、
 里の小供よとやさるゝに、
 一途よものを思へばぞ、
 かゝる時、
 一途よものを思へばぞ、
 身を空蟬の現つなく、
 もぬけの殻と成り果るに、

ものを一途よ思へばぞ、
 大江家よ我身、
 何の恨みのあるべきや」

其五

屋根やぶれてい、
 軒のたる木を月漏りて、
 かべくづれてい、
 ねだの志ま板風透きて、
 夏あつく、冬さむき、
 土生の小屋よ、生れしものを、
 過世よ結びし赤繩とて、

永ながのとしつきやしなこれ、
 實じつの御おん子こも羨うらやむまで、
 昨日きのふのつゞれ今日けふのまた、
 紗さ也やは綸りん子こは暗くられ模様ようばう、
 をとりも之これはあやかりて、
 齡としひもいと長ながかれと、
 むすびてたびし真まこと紅くわいなる、
 オ、言葉ことばも平へい苦くよ、
 ひまかれて、
 今いまさら思おもへば
 忌いとしけれど、

其そのの折ひらりく、
 嬉うれしくまめし名な古屋こや帯おび、
 されど、我わが身みの効たきなく、
 心こころは怨うらみのあらざれば、
 只ただちゝはゝ近ちか江路みちや、
 滋し賀がの古ふる里さと戀こひしさよ、
 袖そでのたもとをかみまめて、
 まなこは露つゆを絶たぎさねば、
 なぐさめて
 御おん夫とよ婦めの、
 見みもなれもせぬ美うつくしさ、

手遊びものよあやされつ、
 次第よなるれば効氣の、
 濡められやすきしら糸の、
 いともたふとき父母を、
 昨夜のゆめのおぼろ氣よ、
 心のそこよゑがくのみ、
 疎くなるまゝ速ざかり、
 我身の其家よおひ立て、
 只いとたけよ日を暮し、
 ねふりのひまさへ
 惜みしが、

思へば、

オ、其の時よ」

其六

耻かしや我、

今の乞食とおちぶれて、

御手洗の、

古き手拭をつゞくりて、

垢よ濡めたるいろく衣、

管の小笠もあめよ洒落、

骨のみたかく肉こけて、

歯なみも斯くの

まばらよくづれ、
かしらよの雪、

まゆよの霜、

まなこの煙霞よとざされて、
鬚の毛つくもよむすほうれ、

膝よそくて、

腰くねり、

一日よ一里もむづかしき、

鬼のひぼしのからびうば、

むかし思へば皺みたる、

背よも汗の、

はづかしや」

其七

思ひ出づれば、今はや、

むかし話しとなりしよな、

曾根中將のたゞ一騎、

處も、處、蹉峨のおく、

折も、折とて、秋の最中、

庭もせよ虫の音淋しき

ゆふまぐれ、

ひねもすのもみぢ狩よ

つかれさせ、

水一口と立ち寄れば、
 雲のやぶれて差し出づる、
 月のかつらの大井川、
 光りをがれてさしを打つ、
 浪も似たるかり衣の、
 あをさおんどの影透けど、
 我身の誰ともしら綾の、
 かさね小袖もけふきのふ、
 萩の葉風のまぶしきよ、
 小簾垂れ籠めて琴とうで、
 ホ、はづかしの縁言よ、

其の時なりし中將さま、
 我身のことよようでうを、
 こしよりぬいで平調よ、
 合すあらべのさうふれん、
 かなで終りて、うつふかれ、
 我の只、

雲井より、
 雁のたまづき賜とりて、
 おほみづかひの仲國が、
 峯のかへでを打ながめ、
 只、打ながめて手折れぬ、

其の様よしも似たる哉と、
 暫しことばの途切れしよ、
 我身いいと次なくて、
 はぢらひながら立ち様よ、
 かへらひ見ればひと啼、
 はらりと大人がさし貫よ、
 抜かれし抑も、
 今よ、
 我身まどそす、
 もとゝなりぬ、
 左りとして我身の

いかなく、

大人を戀ひて居もせぬよ、
 只忘れぬ其折よ、
 大人が落せし志らたまの、
 露か涙か露ならば、
 清らよさえしかたさまが、
 月よも似たる眼の中の、
 かつらの花のしたゝりか、
 左もあらばあれや、
 我身其の後、
 只其の涙よ心をくださいぬ、

左りとして戀ひてり、

居もせぬよ、

ホ、をかしま心の我身哉」

其ハ

オ、猶思ひ出づる事こそあれ、

今宵のごときゆふ闇よ、

風ものすごき夜半なりし、

貝掩の催ほしありて、

大江の家のおからやから、

打つどひ来て興ぜし折、

大人もまた

まねがれて、

オ、其の夜半の事をりし、

我身の歌をほめられて、

我身の琴をほめられて、

うもれ木の

深山のおくよ老ひ朽て、

花を此の世に咲かせぬら、

咲かせぬ事のなどあるべきと、

大宮づかへのおんうまさ、

繰りかへしてのお物語、

我身のこゝろの動きしを、

さらでもと、

かねて内意の大江家よ、

たのむの雁の

おりてやあけん、

我身も源氏よ袂衣よ、

ふりし音をなつかしみ

御簾をへだて、大内の、

おんかげ言をさくよつけ、

行きてみましの秋の川、

末のながれうきくさの、

今日あらんとお思ひきや、

エ、悔ひてせんなき

世のありさま、

浮世のはてを皆小町とい、

あきらめ無しをあきらめた

無理をまことの云ひ草か」

其九

肌さむうなるよつけ、

ひだるくなりぬ

いづこよ煮る夕餐の菜ぞ、

味噌汁の小氣味よげなる

かほりかな、

エ、羨しうらやまのしよくものや、

昔むかしなりせば我われ、

桂かぐらもて玉たまを炊かぐも、

奢たかれると口くち知らざりしよ、

今いま人のあまれるをだよ、

まゝならぬと口くち」

ア、我身わがみ、

大江おほえの家いへの退轉たいてんせむ、

三位さんみの君きみはおくれむば、

此このさまよまで口くち、

落ちざらまじを、

てもさても人の世よの

常つねなきことよ」

さしもは榮さかえし大江おほえ家いへも、

兵火へいけよかゝりし其後そのち口くち、

つい地ぢよのこる白梅しろうめを、

僅わずかよかた見みと止めしのみ、

春はるもむかしの春はるならねば、

何なにをよすがよたのまんや」

其十

ア、ア、ア、ア、

やまにらの葉はよ置露おくれ口くち、

消なばふたゝび結ぶべし、
 かたふく月も来ん秋の、
 また此峯よとたのしめど、
 零ちて碎けし人の身は、
 鳥部のやまのゆふけぶり、
 立ちさらば又
 何時かあへらん
 逢ひがたき御世よ出で、
 受けかたき人とうまれ、
 過世の如何よ懸ければ、
 若し後の世よ鳥とならば、

空よも翼をかえすべく、
 木とも草とも生れんよ、
 枝をも葉をも交さんと、
 まことを契るいもとせの、
 袖すれ合ふを縁よして、
 はなしの口をこゝろ切る、
 道行く人のこゝろもて、
 鴛鴦のふすまを分るてふ、
 甲斐がねよ立つ白雲の、
 こゝろへだてし良人を持、
 たがひよ其れと施子の、

云のねどうきの色は出で、
世を味氣なく

身をはかなみ、

九夏三伏の夏の夜も、

氷をいだく思ひよて、

かゝをまくらの沖の石、

潮はひたりて、幾年ぞ、

エ、思ひ出すも

口惜しけれ」

其十一

オ、今日通り来し道むたよ、

鳥をおどせし報よて、

鳴子のいのちの繩ちぎれ、

葉山子の命のゆづる切れ、

今の世をあきの田よ

捨てられぬ、

此れ彼れ思ひ合すよも、

我をおもひし其の人を、

思ふぬ罪のむくひ来て、

我身も斯くの世のなかよ、

捨てられ果しむけなるか、

つまらぬ浮世よ存生て、

はぢを人目ひとめに晒さらさんより、
 晒さらさんよりのと思おもへども、
 流石さすがに命いのちのをいまれて、
 枝えだよりかげも曳ひさかねつ、
 川かはもこゑを飛とむしかね、
 今いまの六十路むそぢを小動こどうぎの、
 いそがぬ旅たびよとしなみの、
 寄よせて返かへしてまでがひの、
 今日けふが日ひまでをうか〜と、
 潮しほよつられしうとまじさよ
 死しんで任し舞まと念ねんむれど

死しなれぬことこそ、

オ、恨うらみなれ」

滴てき々々露る

くさ葺よぎの〜、軒のきよにほへる干梅しほめの暑あつさを包つつ
 みあからみて、ほやり〜と吹ふきささるぬ
 るみし夏なつのほあり風かぜさまが驕おごるひる顔かほ
 も耳みみあふられて芽めもまほれ、花はなひしげ行く
 田舎道いなかみち」

見渡みわたせば、

蒼あおきものゝあらゆるり、

只あかねさす紅日の、
みお俛首ておともなく

鑪爐のごとく火を吐け、

山や野や草や木や、

なべての爲に焼焦げつ、

其のさまを咲く百日紅、

幹のまじばは花燃えて、

打ち煙り、また打ち霞む、

春の野にしていと遊か、

立つ陽炎のゆらめきよ、

往来の人のかげ絶えて、

世間の沈み静まりぬ」

川若干邑をよざりて草鞋よ、

山路の幾里のぼり行けば、

時しもあれやどやくと、

懸崖よりさざれのまろぶが如く小高き丘

を馳け下りし里のうなゐの一とむれハ蟬

黏を竿を投げまて、巖よむせぶ谿川の瀧

なす流れまよらけく芭蕉の葉かげ露滴る

、其の碧苔をたかむしろ倒れ轉びつ餘念

なく、さざめき合ふて戯れぬ、

爰のしも、爰のしも、

山のそがひの興ふかく、
浮世は速き境なれば、

むら立つ梢のあやを織り、
うづ巻く水口もんを踏む、

霧いとしげく立ておめて、
里ははるか山いく重へ

降りゐる雲の彼方は消つ、

さればよや谷吹きおろす青嵐含めば歯
も凍るべく掬べば肌はあは飯を炊ぐ間は
かな幻のゆめの現は遊びよし、

其の旅人と我もまた、

なりよけらしお、

折からよ、

草いされ浮世を叫ぐ馬追の、

馬やらひ来つ此のさまよ、羨む心や出よけ
ん馬をみぎはよ手綱を岩よ身もまよ汗を
流し清め石を敷寝は合歡の下、

うたてと許りうたねの、

肱をまくらよ耳近く、

夢を洗へる一と休み、

心の如何なる空は舞ふらん、
眠れ馬追ひ汝が心のまよ、

ア、餓て啖ひ渴して飲む、

帝の力我は何かあらんとぞ云ふ、

神代ながらの其の風情」

おもしろや、

汝おそ我は道の師う、

枝折も床し里の子よ、

ア、したはしの馬追や、

静御前

舞へとあらば舞ふても見せん、左り乍ら思へば、
「鎌倉殿」

故左馬の君も見そなれせ言よかしとてさ
かしらを迎へて己が血を分し判官殿をう
らめしや、何くを端としら河の關のあなた
は忍びよし、まだ其のみかいたいけお裳屋
はあげたる初聲の浮世のあやも罪も無き、
少人よまで祟るとい、思へば、
「鎌倉殿」
怨みおそあれ思も無きよ、暮れ行く春の徒
然を妾の舞よあそばんとい、不敵の人の心
哉、知らずや如何に殿原よ、妾都よさふらふ
て、内侍所よ召さるゝも、雲上人よはやされ
て、始めてかへす舞の袖なさけよ、歌ふ曲

もあれ力をかりておしつけの思へばく
鯨倉殿」

妾を女子とあなづりて、手弱きものとさげ
をみて憂きを見せんづ心ならよしく妾
よおもわくあり判官殿と朝な夕な巫山雲
雨のむつ言を舞よことよせはやさせて坂
東武者を法樂よなぶり呉れんとけなげよ
も静其の日の打扮」
薄化粧眉ほそやかよつくりなし、白き小袖
よ唐綾かさね、精好の袴ふみしだし、割菱縫
ふたる水干よ、黒髪さつと振分て、舞ふや霓

裳羽衣の曲みな紅の扇より、ひらめく蝶の
羽軽く」

時しも頃衣更のく、青葉の木陰風渡り
磯吹く浪のおだやかよ塵もあげざる若宮
の神の玉垣ひまも無く、之を見んとて居並
びし、人の氣色の星月夜、鯨倉山とよまおと
なれ」

静の舞曲よ意をよめて、問われずもく、語
らまほしき身の素性、一年都の早魁の蟬の
小川よ水絶えて、四民のなげさ左あそぶと、
院の御幸よ召出され、神泉苑の御池よて、雨

を祈りの舞の時判官殿に戀慕められ、其の
 まゝなれて堀川の御所、此身の世を安く、
 柳のびる春の日も、花は暮るゝを啣ちし
 が思へばかなし兄弟の静けき海は浪立て
 吉野の山のやまふかく入よし君の其のま
 みの跡、またはしや白旗の神もあわれと見
 そなえし、倭文の小田巻操りかへし昔を今
 は此の舞を、豫州も共は兄上と御座分たる
 ことあらば、如何に樂しき事ならん
 と、舞ひおさめたる其の風情、鬼ともくまん
 づむくつけき、坂東武者の腸は断れてこそ

に見えよけれ」

毒湛禪師を辭し虎溪山を出るとて

深しきざりのさきの暗さよ、

首をまぼめて眼路たどれば、

道行く人のかげにおぼるよ、

有ら無き身のかげ法師とて、

此の世を何のしら炭が匂ひ、

樂をかたちの有無も忘れつ、

只其のまゝのさまを詠じて、

儲のやまゝ死よけるよあ」

萍草のひかしにし、稻妻のあふあふと、

たゞよへど我根無きよあらず、

蹒跚とはるの差峨道遠とあきの須磨、

さまよへど我家無きよあらず、

ねう、共音啼くはま千鳥、

飛び去りて空よあと無し、

云う、あれよまた何事を、

四大原是幻、五陰本来空なるを、

咄、

看来れば畢竟明月蘆花よ入る、

非も無く、是も無し、

左るを我ア、何事ぞ、

心から追われぬよ跳ねし稻子哉、

松壽軒西鶴の畫像よ賛するとして

日蔭のかつら三葉四葉よ、

空をさつきひた繁りつゝ

代に苗さす日其あふひの豊逆上るがごと、

代に徳川の水其まみづの彌澄渡るがごと、

さほひよさほひ治り行けど、

かみみ鞍足さがむものゝふよ、

花をあわれむあみだ無く、

あらま弓手巻るまをらをも、

鳥をかなしむなさけ無し、

はる霞たつこの櫻いたづらよ咲き、

更科やうばまての月むなしく照す、

されば、

言葉のはやし風立ちて、

硯のうみの浪荒れぬ、

時しもあれや難波津の

虚空は高く鶴舞ふて、

聲の叩く廣寒宮、

いそのかみ古よし世まで、

はたゝまの響く閻王殿、

天津おとめ下れる世まで、

筆のつばさよ似て、かけり至らぬくまも無く、

想のおほそらのごと、つゝみて容ぬ物も無し、

句を吐て二萬三千、

住吉の神もおどろきぬ、

汝が書き捨ての浮世草紙、

香りの今よいとゞめでたし、

墨川白鷗の詞

其一 富士 列

ふあべりあらふ、月つきをままくひつ、
いよ簾すだもりくる、風かぜはねふらむ、
かまめなく、く

拘とうふ、

捕とうふ、

追たへども去まらで、

笛ふえのみ只ただ、不ふ時じのね、りやうりやう、

其二 筑波つくは 才才列

さら、さらしなの月つきならなくも、
そよ、そよとたつ此こゝさなみを、

かまめ飛とぞ、く

妹いもも来こよ、

弟あにも来こよ、

呼よべどきたらむ、

鐘かねのみ只ただ、つくば山やま、とどろとどろ、

其三 墨川すみがわ 才才列

柳やなぎゆらめけば、つさかげあをみ、
風かぜそよふけば、なみをとさむし、
みやこどり、く
誰たれを、まつち、

何いほごさ

問へどこたへむ

水のみ只をみだ川だうくたり

其四 綾瀬

もやひ切れたる捨られ小舟

捨られ小舟

あなた、こなたへ、ゆらり、くらりと

てもさても、如何なれば我

身をうき草の根をたえて、

ゆう沙みてば、岸よ添ひ、

あさ風たてば、浪よ酔ひ、

只、鳩の巢の浮き沈み

晴、船人こげや、

よし、あしの葉の角芽かきわけ、

かまめと共に、いざみなかみへ、

漕いで武陵のはるならねども、

こゝろの綾瀬、ねふもひらくと

秦をのがれしひとよも逢ふて、

ひとよも逢ふて

問いなむかしの、こゝの渡りよ、

其のなり平の歌よみしふぜい

對空吟

ねふる柳よ、つばめくるへば、

啼くうぐひまよ梅香を送る、

汝の抑も知らでなさけ無きか、

浮世のつひは斯くもあるべし、

何ぞや、我の其を忘れたる、

花をさぐりて、みちよまよへば、

行方を鎖さすかまみ憎らし、

汝の抑も知らでなさけ無きか、

浮世のつひは斯くもあるべし、

何ぞや、我の其を忘れたる、

覺ませ、汝が香よ迷ふ心を、

斷ん、吾もゆめよ畫く其の影を、

戯まよ露伴子と韻を探りし折柄已ア、エ、

の兩列を得しかば

錢あらばいだせよ、肉買うり、

酒のつかひひ、早かへり来ん、

敢立つ浪よ、藻がたよへば、

そよげる風よ、はなも亂れた、

富貴も捨て、無何有のさと、

戯れは露伴子と韻を探りし折柄已ア、エを得て

貧賤もあすれて親姑射の山、
見たまへ世の何かうた形の、

さえつ、結びつ、あらおも白や、

○

まツ斯の如し切るかたまで、

君のそばへい、うかり寄れね、

月照ればおどれよ、忍ばむよ、

花咲けば舞へよ、墨田の河邊、

たをまもく、たなのだるま、

むしるもく、はるのわかめ、

世をしら露の伴とおもいふ、

四角なことの免角よしやれ、

江戸紫の題

むらさき、むらさき、江戸紫

昔のたへ荒袴の衣は摺つ、

春の山鳥のながくし、ひねもす、

夏のほととぎす、明易きよすがら、

花は月をねを忍ひし男女のゆかり、

今の世を何の志ら紙はまり出し、

都下百万文壇は錦の朱を奪ふとぞ云ふ、

一本は千金のねあり江戸紫

春の舎主人

霞のそこは鐘おもる春の夕ぐれは咲花の、
思へばぞ、

おもへばひぢ枕、

世に一炊の夢もやあるらん、

昨日の花の根もかへりぬ、

今日の花よく幾許の盛をや保つ、

得られじを蓬菜が島の靈藥を、

得られねばこそ、

散ればぞ、

散ればこそあれ、

花を愛たさものは見るらめ、

人生不得恒少年、惜むなよ君酒を沽ふの錢、

酔へ、

酔てなげうてよ、花を縫ふ其のふんてを、

聞け、青葉を啣むうぐひすの聲調へるを調、

ひし法法華經の聲の、

如かじ、如かじな、惜まれし昔の春の花のう

ちの靡げなりし其の姿の優しかりしよ、請

君有錢向酒家、名よし負ふて逍遙なれば、君

不見蜀葵花、

さりや、我は歌あり
霞みよし梢の何日かあを築して
花よいとひし風をつるしき哉

竹の舎主人

いさゝむら竹庭よそよぎて、
風待つほどの夏のゆふぐれ、
繚呼ぶこゑは梅をながめつ、
日も此君の無てやのあらめ、
又
花咲むそれ、さけとしやれて、

足らぬを梅の底までおすれ、
そよや浮世を猪口と悟らぬ、

又
きみが谷神の何も無からめ、

酔へりやと問へぬ未だしと笑ひ、
笑へりやと問へぬ未だしと酔ふ、
今の世の死酔候、
酒あらば夜一夜、日も足らず、
唯、ねぬなそのぬらりく、
去れ、我の尾を泥中よ曳かんとぞ云ふ、
其の藏六よく、

劍菱の實は腹を破りて、

鷗外漁史

あろきい雪の雪のごと、
照る月影の池の面は、
観すころの言さやぐ、
日耳曼の國ゆ持てきよ、
其の葦蟹のよこは這ふ、
真竹のながね爰はうつし
こゝは移して、益良夫か、
修羅の巷はたなまくる、

衣のたての継文字と、
なましよけるかも、君が抑も、
何を志ぬびの河の瀬は、
うちも打たる、志我良美を、
命と交ちて、寄りよれる、
其の花片のいろくを、
足掻き啄喰み、たをふれつ、
心の餘所は、身を措きて、
浪のまよく、世と遊ぶ、
其の世と遊ぶ、たのしみは、
小夜更て、く、

柳ねふりし空を高み、
空をたかみて、鳴と云ふ、
かまめの外の、知るよしあらじ。

古茶樓主人

さくらんか(山茶花)と云ふ花なりと思へば、

松の葉なりで此の世の中を、

さくらんかと云ふ酒なりとおもへば、

松の葉なりで此の世の中を、

(又自注君に如き小説多く有せり)

させ刺もよし蜂のごと、

させ挿もよし柳のごと、

左れど、

藤遊のうらくと立つ小紫垣、

霞は酔へる春のあけぼの、

蜜醸る爲め花をねふりぞ、

根も無きもの葉をしげらせぞ、

ねふるもよし舌鼓打ちて、

しげらすもよし培養て、

左れど、

見地あやしく箴をな研きぞ、

搔けよ總角、

こ不れ松葉よ箴ありとも、

よじ箴ありとも、

其の箴をこそ命なるらめ、

靈 魂

手よむすぶ水よどりし月影や、

よどみよ浮ぶうたかたの、

有か無かの世よぞ住む、

吾人々のはかなきや、

あらし待間の夜さくらや、

散らで過べき身ならねむ、

苦しき海の淵瀬よて、

浮きつ沈みつ、誓小舟、

たま藻薺るとも何かせん、

さゆ去りながらわがらそよ、

斯世ようまれ来しうへに、

世よふさゆしきなりそひの、

道をまもりて、ひたすらよ、

意馬のくるひを、つなぎとめ、

喜怒哀樂を平らかよ、

はかりの如く、箴のごとく、

其の箴よかけて、實相の、

心の鏡研ぎすまし、
よまあま草のくさくさ、
うつる姿をあやまたづ、
執着輪廻せぬとき、
穢土も其のまゝ極樂ぞ、
心佛衆生無差別ぞ、
かゝるたのしき其の道の、
まつげの下もあるも猶ほ、
ゆめも知らじ悟らむ、
利慾はおかれ名の爲、
修羅のちまたはあらそふ、

阿鼻焦熱の地獄ぞと、
雪の山人たふとくも、
権は因果を蓮の露、
ひき説かれたる法の門、
彌陀の御國と説かれしも、
心をたねのおしへどと、
識るやしら雲ふみ分けて、
山は入る人やまよても、
あきらめ無し其の時、
何處は行きて何かまゐる、
西や東の國々よ、

教のかづの品あれど、
 みを真心を種として、
 あしきことをば速ぎくる、
 其のでだてとぞ知られける、
 あだし教のみりとして、
 いまは傳ふる其の中、
 孔子をのぞく其の外、
 皆ことごとく吾人の、
 みたまの親を立てられき、
 すべて斯世は吾人の、
 みとまの説を立てるは、

三千四千歳の前の世は、
 人のおろのくらくして、
 燈火の無き其の世は、
 父をも知らむ子も分ず、
 仁義の道は更は無く、
 鳥やけものとむれ居して、
 只かたくあゝいと強く、
 つよき人のみ審みさうえ、
 弱きものこそあわれも、
 虐げられつ棄てられつ、
 堯捨山の今にさ、

名のみなれども、其の音ね、
 かゝりし事ことの、ありしかも、
 夫つとを救たすはんが、其そののさめよ、
 かしおき人の世よに出いで、
 人ひとの人ひとたる、斯あ道みちを、
 立てられしかど、如何いかよせん、
 おろかお民たみ等らうけがいで、
 あしき草くさのみ、日ひよましよ、
 蔓はらりゆきて、今いまは、
 八重やへの敏と鑣さを、ふるふても、
 薙はしがさかる、ありさまよ、

一ひとしほ心こころを、いとめられ、
 たとへよ道みちを、かりそめの、
 むくろの失うせし、其そののあとよ、
 罪つみのかづ、く、むくひ来て、
 みさまの獨ひとり、くるしみを、
 受うるものぞと、説とかれしが、
 人を導みちびくもとよして、
 漆うるしめはじめたる、白しろ線いとや、
 みだれを爰こゝよ、おさめつゝ、
 かさくお人ひとを、手て引ひきせし、
 さきがけとこそ、知しられける、

吾はらからの、おとゞひよ、
 吾はらからの、おとゞひや、
 いまだねふりの、さめやらで、
 權の教よさまよふか、
 如何ほど説を、たくむとも、
 天と唱ふる、天も無く、
 地と稱へたる、地もあらじ、
 むくろの失せし、其のあとよ、
 魂魄のみの、ある、わけあらじ、
 よし残るとも、何かせん、
 世界のひらけ、そめしより、

三千四千歳よ、ありぬれど、
 死せよし人の、日數へて、
 まよよみがへり、世よいで、
 魂魄の中なる、ありさまを、
 説かれしことも、聞ざれば、
 因果三世の、おとはりも、
 死せよしあとも、あらむして、
 現世のことゝ、知れよかし、
 少しまあびの、才あるや、
 たとへの文の、おもしろく、
 とくるまよく、おぼれそめ、

深き旨をばあやまりて、
 みづから心は得たりとし、
 己が所説は忤ふは、
 舌の刃は斬りふし、
 ひとふる人を惑はして、
 真の道と、おもふなる、
 人を救はん其の爲は、
 立ておかれたる其の道を、
 ゆがみし道は悟らるゝ、
 人の心は己ははや、
 まよひの中はまよへるぞ、

迷ふなと説く其の人が、
 己はまよへば夫をきいて、
 悟らるゝ人またまよふ、
 迷へる上はいやまよひ、
 影はほえたる門の犬、
 一度啼けば其の聲は、
 共吹まるとことならじ、
 世はとこやみとなるぞかし、
 日はまよみ月はひらくる大御代は、
 生れ逢ひたるわれくゝり、
 三千四千歳も前の世は、

かさくお人を導きし、
 權の教のかづくよ、
 まよせられじ迷ひと、
 思ひ居れども如何せん、
 浮世のひろく人多し、
 くしき教も迷ひされ、
 吾と我身でわが智恵の、
 光をおぼふ忘れ者の、
 若しやのゝあると藻汐草、
 かきつくされぬ貝多羅の、
 其のちりぐの、そのあかの、

一ひらを爰も釋くものならじ、

出 放 題

きのふの過ぎぬ明日の未だし、
 君も若し、
 肉あらば食ひせ給へや、
 君も若し、
 酒あらば飲ませ給へや、
 世の中、
 今日の外唯現在の今日の外、
 明日も明後日も無きものを、

あらば其の、あだなる名のみ、
あらば其の、むなしき名のみ、

世の中、

唯おもしろきものなるを、

其おもしろきものとして、

唯現在の今日のほか、

明日も明後日も無ものを

我酒癡あり飲めや人、

我琴棚あり弾けや人、

醉は我其酔の國に住み、

彈は我其聲の國に住み、

住まば我其酔となり、

住まば我其聲となり、

其酔の我なるか、

其我の酔なるか、

其聲の我なるか、

其我の聲なるか、

彼もなく又我も無き其時、

夢と見て夢ならじ、

夢ならば其の夢、

誰も云ふ夢ならで、

夢ならぬ夢ならぬ、

夢ア、夢なるかな、

夢なるかな

醒めたりと云ふ其人の酔へるは、

酔へりと云ふ其人の醒たるが如、

是を説かば、非中是あり、

非を説かば、是中非あり、

我馬をもて彼馬を説かんより、

彼馬をもて彼馬を説け、

彼指をもて我指を説かんより、

我指をもて我指を説け、

世の中、唯一指なるをや、

世の中、唯一馬なるをや

君見むや、

天地の笛なるぞ、唯大なる笛なるぞ、

吹くの抑も何者ぞ、

見えねどもかたちとて、

唯明らかゝ見えねども、

春来れば、花うるはしく、

秋去れば、雪おもしろし、

進むと如何なるを退くと見て

進むなるか、其の能も得知らねど、

進むと云ふ世の中

進むと云ふ世の人の、
 夏暑く冬さふしとぞ云ふ、
 其道理の合點ど、
 肯へど、

おしひろめ、押詰むれば、

世の中の唯一指なるをや、
 世の中の唯一馬なるをや、

天地の笛なるぞ、唯大きなる笛なるぞ、

吹くの抑も何者ぞ、

何者とい得知れねど、

繇にあたれば繇よ、

竹にあたれば竹よ、

金にあたれば金よ、

石にあたれば石よ、

山よ、

河よ、

海よ、

数へても数へづくせぬ其もの、
 吹きたり吹きあたる其かぜ、

其音、

幾千萬と数へても数へ盡せぬが如、
 世のおかの差別とし云へるものを、

是非としも云へるものを、
 差別して數へなば、
 其を數へつくせぬがごと、
 又數へつくされじ」
 ふりかへれば我年の、
 かぞふれば我としの、
 四五千年よやなりぬ覽、
 進みきたりぬ我知慧の、
 殖てきたりぬ我知慧の、
 進みきたればこそ、
 ふえきたればこそ、

名も無きよ名をつけて、

理學、格學、猫、杓子、

アハ、アツ、ハツ、ハ、

我知慧の妻まじ、

わが知慧えらし、

それでこそ理學、格學、猫、杓子、

唯いろくよ名を附て、

底無き穴よつ這ひて、

頭の、蜘蛛の團よ、

顔の、かほほりよ、

息もたへく迷ふ人、

あわれれく、アナわれ
 見来れば、我身世は出で、
 白藤の有無をだも知らぬ、
 えぞ知らぬ、まだ効び頃より、
 今の頭は霜ふりて、
 アハ、アツ、ハツ、ハ、
 まだ霜などの降らねども、
 四五千年の今日が日まで、
 石の石、花の花、竹の竹、
 花が石も咲きのせじ、
 竹が花もなりのせじ、

わからぬものゝ詮索を、
 分らぬものは爲るとい、
 アハ、アツ、ハツ、ハ、
 唯笑へ笑ふて遊べ、
 世の中は、
 唯現在の今日の外、
 明日も明後日も無きものを、
 止れや蝶々、菜の葉へ止れ、
 菜の葉があいたら、
 よしの先きへ止れ、
 止まるるところを忘れなば、

猶^{なほ}追^おわれし蝶^{てつ}々の、
莊^{さや}子の夢^{ゆめ}よりなされやせん、

旅鳥

ふところ淋^{さび}しき旅^{たび}なれば、
むやみは先^{まへ}のみ急^{いそ}がれて、
一^{ひと}里^りも前途^{ぜんそ}へ近^{ちか}かれと、
勞^{らう}れし足^{あし}をばがまんして、
向^{むか}ふの宿^{しゆく}へといそぎつゝ、
お日^ひさま山^{やま}邊^べは落^{おち}ぬうち、
此^この松^{まつ}原^{はら}をとあせれども、

あらしは喰^くれし足^{あし}おもく、
並^{なみ}木のなから日^ひの暮^{くれ}て、
夕^{ゆふ}月^{づき}こだかくひんがしの、
はるか^{はるか}の峯^{たかね}をば飛^とび離^{はな}れ、
見^み渡^{わた}す限^{かぎ}りのやまゝ、
次第^{しだい}はまを濃^こく霧^{きり}籠^こめて、
暮^くれたりゝ急^{いそ}ぐとも、
今はた何^{なん}も甲^か斐^ひの無^なし、
脚^{あし}絆^{はん}の紐^{ひも}でも志^{こころ}めなをし、
ゆるりと宿^{しゆく}まで歩^{あゆ}まんと、
おもふて倒^{たふ}れし松^{まつ}の木^きよ、

腰打懸けんとするはづみ、
 草鞋のまへつば踏切りぬ、
 これのと擧めた其の顔の、
 若しやの可笑ありつらめ、
 後よりつゞきて落葉掻く、
 熊手を肩げて来かゝりし、
 田舎のむすめは笑はれぬ、
 よき機なればと吟留めて、
 ゆくての里敷をうら問は、
 顔をばあかめて口籠りつ、
 返辭も爲し得てむたくと、

ほこりを蹴立て行き過ぬ
 折から浮雲むらくと
 月をばかくして暗ければ
 日頃のつくき鳥なれど
 今宵の折はやふれぬらん
 鳴くむら鳥もあこれなり

須磨の月夜

波さへも、

煙りよ音をつままれし、

風無き夜半の須磨の浦、

松のひびきも静やぎて、
 見渡す沖はひとつぼし、
 なさけを知らぬ海面の、
 次第はひかりを吞初て、
 いまのまがたも滅々よ、
 眼を屢叩き打ちあびぬ、
 其のありさまを譬ふれば、
 壽永のむかし平どくが、
 都を志のびしほたれて、
 浪のゆらく世の中を、
 棚無し小舟と啣ちたる、

女官の風姿もまの當り、
 斯くやと思ふをり柄よ、
 ちぎれくの雲間より、
 真白よおつる月のかげ、
 淋しき様を見るよつけ、
 思ひ出るの其のむかし、
 松を吹く磯風黒み、
 海を吹くまつ風くろみ、
 浪のおと、
 血煙り立て、打ち寄し、
 平家の武士が討ち死の、

朝は洒落たる死散をば、
 照し来りしひかりかと、
 思へばそぞろ恐毛立ち、
 其のまゝ其處に踏めば、
 何よさあげるむら千鳥、
 撥と立しもあそれなり、

李白の菩薩蠻の意を譯す

見渡せばいづこを端とゆふ煙千里を籠めて
 空速くはるか霞むあの山に、エゝあの山の
 故郷をへだての關なるか關と思へばあかま

がよ憂きをいくらか慰さむよ、今の其れさへ
 かき暮れて、あたり淋しく日の暮れぬ」
 エゝもう今日の暮れたかと、志よんぼりと立
 つ段階をかすめてさあぐむら鳥あまへの時
 の近うてよいが我等が國への街道に此の村
 はづれ彼の宿を」

おなとく柳永の卜算子慢を

江を渡る風も次第に老ひゆけば蓮の枯葉の
 がさごそと、思へば旅のなをしきり暮れ行く
 秋の空速く、断えては續く夕ばえの中よりひ

いく里^{さとし}砧^{せき}胸^{むね}をうたれて、打^うれてむねを、昨日^{きのう}の
 なげき今日^{けふ}のまた人^{ひと}をうらみのます鏡^{かがみ}うつ
 せばなどか萬^{まん}重^{ちゆう}の海^{うみ}山^{やま}水^{みづ}を隔^へつとも、うつら
 んことこのよもあらじ我^{われ}此^この思^{おも}ひ折^ましもさつ
 と村^{むら}時^{とき}雨^{あめ}川^{がは}霧^{きり}くらく立^た籠^{かご}めて、心^{こころ}ばかりのふ
 るさとの我^{われ}家^やの庭^{にわ}のつまをり戸^とひらくまお
 そし雲^{くも}晴^はれて、望^{のぞ}みの絶^たえぬ眸^{まなこ}の、つゞく限^{かぎ}り
 の山^{やま}また山^{やま}エうつらよくやあの雁^{かり}の、文^{ふみ}ひろ
 げつゝ鳴^な連^つれて、むつまじさうよ飛^と来^くるの、何^い
 處^この誰^たへ音^ねづれぞ、爰^{こゝ}よこうした我^{われ}居^をるよ、

原作者の名を失す 二首

深^{ふか}ゆくそらよ只^{ただ}一人^{ひとり}星^{ほし}をかぞへて千^ち鳥^{とり}足^{あし}そ
 よりそよよ吹^ふきまわす風^{かぜ}ひいやりと家^{いえ}近^{ちか}
 く歸^{かへ}り来^まりし心^{こころ}地^ちよさ何^い時^つねふりしか知^しら
 ぬ問^まよ目^めさめて見^みれば枕^{まくら}頭^{あたま}香^{かぐ}のけふりのす
 ぐよかよ亂^{みだ}れぬ鬢^{びん}の薄^{うす}化粧^{けいざう}よこめよそれと
 醉^{よめ}覺^{ざめ}の鐘^{かね}子^すの水^{みづ}よ舌^{した}つとみ、うつゝか夢^{あむ}か、あ
 ツはッはッ、何^{なん}の浮^う世^よの五^ご十^{じゅう}年^{ねん}、

○

君^{きみ}を思^{おも}ひのゆめ破^{やぶ}れ、ねがへり打^うてばあやよ
 くよ屏^{へい}風^{ふう}よ残^{のこ}る筆^{ふで}のあと、うつゝよ見^みしは是^{これ}

原作者の名を失す

かやとふツと目さめる耳近く、月を摩すりて
聲さへも血よむせびゆく時鳥不仕合なる情
郎の今いづくの端よ此鳥を同じおもひよ音
を忍び嘆いて居らるゝ事やらとつぼめる蓮
のふくよかよ匂ふ腮を二線よいろどり残す
此のうらみあつき涙どやるせなや、

○

米僊子の西京へ行れしと聞き想、鴨河
納涼よ走せて

暮れて行く柳おぼろの川べりを隈どるもや

の濃く淡く、たのづからなる風がふで今いろ
どりの其の最中よ響瀾曉抑も離家ぞ見上ぐ
れば伊豫簾のそとよ釣燈籠波おばしまよ打
寄せて、笛の音あをし鴨の夕涼明石も須磨も
よそならぬぞへ、

浦のとまや

うらのとまやの曙ゆかし

しろく鷗をそめぬいて、

浦の苦屋のあけぼの床し

そなれ松風さつくと、

うらのとまやの曙ゆかし

ほそく幽^{あやう}はあけのかね

浦の苦屋のあけぼの床し

なみを彩^{いろ}るあさひかげ

うらのとまやの曙ゆかし

松を波越^{なみこ}まおとさえて

浦の苦屋のあけぼの床し

ちらりちらりと漁火^{いさごび}が

うらのとまやの曙ゆかし

光^{ひか}りしらけし月^{つき}ひとつ

新體梅花詩集終

梅花詩集跋

世の憂さよ代へたる山の淋しさを問ひ
 めを人のあさけかりけると參學の輩訪
 ひ来りける時よ其昔鴨の長明がまねた
 事いふたりし濃洲虎溪よ、去夏君か引籠
 られし折ひ、あゝ口惜し血氣さかりの身
 をもつて君も亦古来のへちま風流のよ
 がれよ酔ひ、松籟泉聲を小夜の寝ざめの
 伽とまゐるあんどいふゑせ隠者の仲間よ
 入られしかと、そゞろよ悲しみしか、我が

おもひの外は君の出で野分とつ頃躑々
然として我庵は来られ山寺の味噌汁別
は變つた味もおおえねの左程都外は居
りさくもあさましく唯是だけを旅のみや
げはぶらりと歸りしと投出されし此
詩集ありし今此詩集の出版よつきて机
上の考別は面白い跋も出来ねばと唯其
まゝを記して梅花君の需めは應をるも
の

谷中村の

露伴

ニ

明治二十四年三月九日 印刷
明治二十四年三月十日 出版

正價金貳拾錢

著者 中西幹男

東京淺草區千束村五百十六番地

發行者 大橋新太郎

東京日本橋區本石町三丁目十六番地



發行書肆

博文館

必昇社印行

東京日本橋區繪屋町九番地

東京日本橋區本石町三丁目

第一高等中學校教授小中村義象 兩先生著

挿繪揮毫 松本楓湖先生

家庭教育歴史讀本

每月壹回發兌
每卷記事讀切
和裝美本仕立
彩色密畫挿入

○正價金十二錢○六冊前金六十七錢○十二冊前金一圓二十五錢○郵税一冊四錢

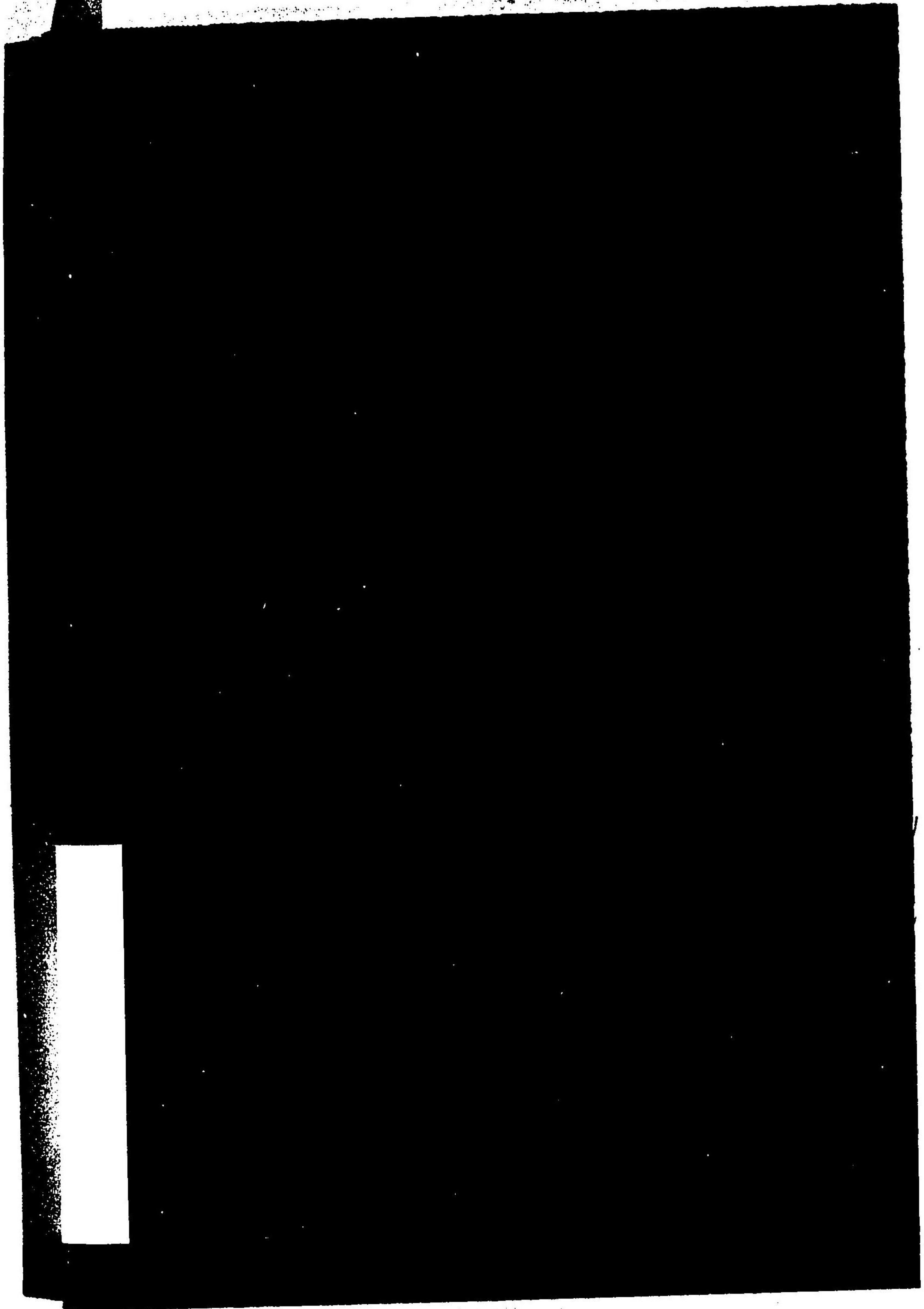
第壹編目次 (二月發兌)

能褒野の露 (日本武尊の)
裾野の嵐 (曾我兄弟の)

讀切完結

第二編目次 (三月發兌) 如意輪堂(楠正行公)ノ事蹟(泉岳寺) 赤穂義士(復仇事蹟) 二編讀切
少年ノ教育 豈止ダ學校ノミニ止マランヤ、忠烈孝義ノ情實ニ家庭ノ感化ニ
育ヲ資スルヲ精神ヲ、落合、小中村ノ兩先生ノ嘗テ編述シ置カレシモノ
御主意ヲ奉戴シ一層忠孝彝倫ノ道ヲ正シ國民ノ元氣
ヲ感發ニ精密ナル世入ノ既ニ知ル所ナリ、故ニ此ノ書ヲ讀ムモノハ、忠烈孝義ノ念ヲ養フト同
時ニ文ヲ學ブノ好師ヲ得 世ノ愛兒令孫ヲ有スル方ハ勿論、幼ク
モ道ト文トニ志ス少年諸君、讀テ發憤アレ





特22

270

新体梅花詩集

国立国会図書館

088028-000-3

特22-270

新体梅花詩集

中西 梅花 (幹男) / 著

M24

DBG-0125

